宝くじシュート！
何度も何度も「副市長は二人も要らない」と言い続け……
副市長一人を実現。

大前提

議会は立法府である。地方の法律である条例は議会で決める。条例の提案権は、市長と議員にある。ところが島原市議会もまた全国の地方議会同様、市長提案の条例が99パーセント。議員の待遇問題（定数・報酬）以外はほとんど市長任せの歴史だった。

市長の提案にイエスかノーを言うだけ。その条例案もほとんど原案可決という実態で、追認機関と呼ばれ、チェック機能も果たしていなかった。

市役所に都合のいい条例は出来ても本当の市民目線の条例は出てこない。市民の声を直接聞く議員が提案し論議して、条例が出来てもいいはずである。

地方自治法は議員提案の条件として、議員定数の12分の１以上の賛同が必要としている。島原市議会は21人であるから、二人で提案できる。

伏線

松坂はこれまで何度も議員提案を試みてきた。少数意見として否決されることがほとんどだったが、「宝くじシュート！」訴え続ければ必ず「正しいことは通じる」と信じて投げかけてきた。

島原市は、合併時に助役（副市長）を二人にした。松坂は人口５万人規模では副市長は置かなくてもいいと考えている。ましてや合併後何年もたつのに二人は多すぎる。

松坂は清水宏議員と相談して、数名の賛同も得て、合併後副市長の任期が満了する時期を捉えて２度、副市長の定数を２名から１名に戻すよう提案した。（2009年12月議会・2010年３月議会、いずれも賛成少数で否決）

また、旅費条例も提案（2010年６月否決）同時に水道料金正常化条例も議員提案。非自公系議員で結束し、議員提案による条例が初めて可決する一歩手前までこぎつける実績を作った。（2010年９月で否決）。**議員提案は島原市議会では常識**となった。

あきらめない

改選後の2011年６月議会直前、谷口副市長が任期を１年半残して辞めるとの情報が直接市長から入った。副市長の選任は議会の承認が必要だが、解任には議会の承認はいらない。なのに６月議会最終日に退任の挨拶を許して欲しいとの打診。「条例はそのまま二人にしておいて、当面一人で行く。」とのことだったので「この際（条例を改めて）副市長は一人にしては。」と提案をしておいた。

情報が入った以上、「**副市長が二人も要るものか**」という市民の声はぶつける必要がある。非自公系で集まって、自公系に歯止めをかけようと議長選候補一本化などを話した際、副市長一人条例を出そう！と提案した。

勝てるはずの水道料金で市民の常識が通じなかった苦い経験があるため、どうせ否決されるだろうと積極賛同は得られなかった。清水宏議員だけが「筋を通すべきである。」と賛意を示し二人は諦めなかった。

議会事務局に指示して、過去２回の時と同様の副市長定数一人条例を出す準備をした。

どんでんがえし

議会の日程に間に合うよう条例を準備して提出の運びとなった。

松坂が出すと言ったら絶対出す。否が応でも本会議での議論になる。谷口氏の後任も提案できない今、二人の副市長が必要だと説明することが出来るだろうか。自公系与党議員も僕らの常識的提案に反対の理由が見つけられるだろうか。

すると私たち二人が提出する前日に突然市長の方から**全く同じ内容の条例**が提出されたのだった。議会運営委員会で、私たちの条例案は（同じものだからと）廃案となり、結局市長提案条例が全会一致で可決された。

その後、市長は青年会議所の主催するマニフェスト検証大会で、行財政革を進めたとして高い評価を受ける結果となった。